

AMDA国際貢献大学校に残して

廃校の哲多・大田小

児童数減少により本年度限りで廃校となる哲多町田淵、大田小学校の全校児童十八人が、思い出の詰まった木造校舎をモチーフにした銅板のレリーフを作った。学びやは、国際医療ボランティア・AMDAの関連団体「アムタ国際福祉事業団」が運営する国際貢献大学校として活用されるため、レリーフをそのまま大学校に残し、国内外からの研修生らに見てもらおう。

全校児童 18人制作

児童たちは、同小伝統の版画カレンターづくりで培った彫刻刀技術を生かそうと、校舎のレリーフの作製を思い立った。昨年十二月から作り始め、今月に入り完成させた。

レリーフは縦六十七センチ、横百六十七センチ。厚さは五ミリ。銅板（縦十九センチ、横十七センチ）を二十七枚張り合わせており、

学びやレリーフに

彫刻刀を扱う要領で、はしで太い線、くぎで細い線を引き、銅板を腐食液につけ、線の跡が黒くなるようにし、ニスを塗って仕上げた。

校舎は木造平屋約六百平方メートルで、一九六五年に完成。朝礼台や校庭の一角の樹木、校舎の壁の傷と黒ずみまで、繊細に表現している。

児童は新年度からは新設の新低小に通うが、六年江田直徳君は「レリーフに僕たちの思い出をすべて注ぎ込んだ。僕たちが学んだあかしとしてずっと大切に残してほしい」と願っている。

町条例に基づく国際貢献大学校は校舎を一部改築し九月に開校。国際保健医療学部を設置し、専攻（一年）、専門（二年）、研究（三年）の三課程を設け、国際的な人道援助を行う人材を養成する。

「思い出すべて注ぎ込んだ」

学びやを描いた銅板レリーフを手にする大田小児童たち

